

## 瀬川孝吉写真にみる 1930年代台湾ツォウ族のバナナ利用と現在

原 英子\*

Banana Cultivation in the 1930's and Now Among the Tsou Tribe of Taiwan:  
A Comparison Using the Ethnographic Photos by Kokichi SEGAWA in 1930's

HARA Eiko\*

### はじめに

西暦2000年と2009年に台湾の南天書局から、台湾原住民族のツォウ族とブヌン族の写真集『瀬川孝吉 台湾原住民族影像誌』<sup>1)</sup>が出版された。撮影者は台湾原住民族居住区で植物採集や農業指導などをおこなってきた瀬川孝吉(1906-1998年)である。戦前の1930年代前後に台湾で撮影した原住民族の多数の写真のなかから、ツォウ族、ブヌン族関係の写真を集めて瀬川の没後、出版された。瀬川は、自己の専門の植物だけではなく、原住民族の生活の様々な場面や道具、建物等を撮影しており、こうした写真を集めることで、当時の生活の一端がわかる『民族影像誌』となっている。

瀬川の写真は歴史的記録として評価が高い。しかし瀬川の没後に出版された『台湾原住民族影像誌』は、残念ながらいくつもの難点が指摘されている。瀬川孝吉撮影以外の写真が説明もなく差し込まれ、しかも出所表記がなされていない点、現地語表記や説明に誤りがある点、台湾原住民族の分類が、従来の分類とは異なる点、日本語、中国語、英語がそれぞれ表記されているのはよいが、英語訳には誤りや不的確さがみられる上に、日本語、中国語、英語訳が対応しておらず、特に英語訳は、時として重要な部分にもかかわらず落とされている点が見られるなど問題は多い[土田2000: 215-233, 石垣2010: 207-213]。長く国立民族学博物館で研究をしていた松澤員子によると、瀬川は、フィルムとは別にベタ焼きにした写真を貼ったカードを丹念に作成しており、それぞれの撮影場所(村名)や年月日、簡単な説明などの情報を記入していたという[松澤1995: 92]。

\* 岩手県立大学盛岡短期大学部; Morioka Junior College, Iwate Prefectural University, 152-52 Sugo, Takizawa city, Iwate Prefecture, 020-0693 / kusaba@iwate-pu.ac.jp

1) 以下、『民族影像誌』と記したものは『瀬川孝吉 台湾原住民族影像誌 鄒族篇』を指すこととする。

しかし、出版物に瀬川の記録が明示されていないため、瀬川の文章なのかどうかのわかりにくく使いにくさを感じる。出版された『民族影像誌』は湯浅浩史著となっているのであるが、本報告ではひとまず瀬川が書いているものとして扱っていく。ただし、引用や参照するときは、出版物の著者名として湯浅の名を使用した。瀬川の写真自体は 1930 年代前後の台湾原住民族の生活を、2020 年代の私たちに視覚的に提示する貴重な記録である。これを活かしながら報告を行いたい。

調査は 2017 年 2 月に、台湾阿里山郷のツォウ族が居住する楽野、山美、里佳、トフヤで実施した。

## I ツォウ族のバナナの重要性について

現在、世界市場に流通しているバナナの品種は「キャベンディッシュ Cavendish」と呼ばれる品種（AAA）である。ダン・コッペルによると 1980 年代にマレーシアにはじめてキャベンディッシュを栽培するプランテーションができると瞬く間に一大ビジネスに成長した[ダン・コッペル 2012: 7-16]。

キャベンディッシュは台湾では「華蕉」という品種名で売られている。国際的に流通しているキャベンディッシュだが、台湾では 300 年前に福建省からもたらされたとされる「北蕉」（AAA）が戦前から主流で、現在でも進化した後裔が栽培されている [蔡 2015 : 34-35]。台湾ではこうした古くから市場に流通した栽培種のほか、皮が赤っぽく、果実は短く太いが果肉は黄白色で甘くてかおりがよいバナナ「紅皮蕉（Morado）」などはインドネシアから移植されたバナナで、外国から来たこうしたバナナも栽培されている [蔡 2015: 35, 鄧・朱 1996: 17]。

瀬川は台湾の在来種に注目していた。つまり市場に流通するバナナではなく、各原住民族が育てている特有な品種のバナナのことである。瀬川によると台湾原住民族が育てているバナナの共通点は、生食用の品種であることだという。ただ、そのなかで唯一ツォウ族には、加熱する料理用バナナが数種類栽培されており、これに注目している [瀬川 1954 : 60]。『台湾原住民族影像誌 鄒族編』にも、調理用バナナの調理の写真が記録されている。

## II 『瀬川孝吉 台湾原住民族影像誌 鄒族編』に見るツォウ族のバナナ

『民族影像誌』ツォウ族篇は本文が 208 ページである。それが以下のような 10 章に分かれている<sup>2)</sup>。

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 第1章 序説,        | 第2章 体質,        |
| 第3章 男性の衣服と装飾品, | 第4章 女性の衣服と装飾品, |
| 第5章 集落と建築物,    | 第6章 農業,        |
| 第7章 漁撈と狩猟,     | 第8章 飲食,        |
| 第9章 生活用具の製造,   | 第10章 生活及びその他   |

バナナの記述は2か所に見られる。ひとつが植物としてのバナナについてで、第6章農業の項目中に、3ページ [pp.116-118] を使って写真とその説明が載せられている。もうひとつがバナナの調理法についてで、これは第8章飲食の項目に、「バナナの加工」として7ページ [pp.169-175] にわたって写真と説明がなされている。

本報告では、第6章の部分を中心に扱っていくが、必用に応じて第8章にも触れる。第8章に主として書かれているバナナの加工については機会を改めて扱いたい。

### III バナナの名称

#### 1 『瀨川孝吉 台湾原住民族影像誌 鄒族篇』に記載されたバナナの名称

『民族影像誌』ツォウ族篇第6章の116-118ページにはバナナの名称が4つ、写真とともに掲載されている。これに(a)(b)(c)(d)という記号をつけ、掲載されているカタカナ、ローマ字表記をそのまま転記した。ただしローマ字表記とカタカナ表記を見比べると一致していない部分が見られたので、その部分に下線をつけた。

- |                |                        |
|----------------|------------------------|
| (a) ツヌム ノ フー   | cnūmū no <u>cohūmū</u> |
| (b) ツヌム ノ ブユクイ | cnūmū no buyukui       |
| (c) スバ マシス     | suba <u>masūicū</u>    |
| (d) ツヌム ノ バンカケ | cnūmū no bankake       |

それぞれ下記のような語彙の説明が書かれている。

- (a) フー cohūmū は「美味」の意味
- (c) マシス masūicū は「酸っぱい」の意味。
- (d) バンカケ bankake は「丈が高い」の意味。



[湯浅 2000: 116-118]

【写真1】 2) aisisi no suba

2) 各章タイトルの原文は、中国語だったので、日本語に翻訳した。

## 2 インタビュー調査によるバナナの名称



【写真 2】 3) の熟した実。大きさ比較のため右下にボールペンを置いてみた。



【写真 3】 3) 実の皮をむいた。左上にみえるのはボールペンの頭の部分。

サビキ社で以下の在来種のバナナの名称とその由来がきかれたのでそれを記す。記号は 1) 2) 3) で記す。

### (1) スバ suba と称するバナナ

1) suba puhngoya : 実が赤いスバ、茎や葉も赤っぽい色が出る。

2) aisisi no suba : aisisi は本当のという意味 (写真 1)。7) にも「本当の」という意味のバナナがあるが違いは不明。

3) suba no hu : 実が灰色のスバ。あるいは suba no bohboya (倒れたスバ) ともいう。少し灰がかかったような実がなる (写真 2, 写真 3)。栽培者の説明によると、茎が伸びていくと、やがて高くなりすぎて倒れるが、倒れたあとからも実がなるので suba no bohboya というのだという。果肉は少し柔らかいという。



【写真 4】 4) cnūmū no hu

### (2) ツヌム cnūmū と称するバナナ

4) cnūmū no hu : hu は灰の意味。3) と同じものかどうかは不明。灰の粉がかかっているような果実ができる。台湾の市場では粉蕉という名称で、でているという<sup>3)</sup>。(写真 4)

3) 齋藤外二「台湾のバナナについて」(1932)の 325 頁に、「台湾バナナ」の種類として表中に「北雀」,「粉雀」の字が見える (これは北蕉, 粉蕉の誤植と思われる)。「粉蕉」は戦前にはすでにあった品種のようだ。日本語で「三尺バナナ」といつている。英名 Chinese-dwarf, Dwarf-cavendish。中国南部の原産だという [渡慶次 2000: 125]。





【写真5】 5) *cnūmū no bankake*  
筆者と比べて丈が高いのがわかる。



【写真6】 5) *cnūmū no bankake* の実

5) *cnūmū no bankake* : *bankake* は高いという意味で、丈の高さが高いツヌム。(d) と同じ名称である。(写真5, 写真6)

栽培者によると *suba no bankake* というものもあるという。*suba no bankake* は、果実の香りは弱く、味は酸っぱいが、熟したらリンゴの味のようにフルーティーだということである。

6) *cnūmū no pepe* : *pepe* も5) 同様丈の高さが高いツヌムという意味。ただし5) とは味が大きく違い酸っぱい。果実は主に餅をつくるときに利用したという。

7) *cnūmū no umunu* : *umunu* はおいしいの意味。

*cnūmū no auru* 「本当のツヌム」ともいうことができる。酸味が強い。

8) *cnūmū no masūicū* : *masūicū* は酸っぱいの意味。(c) と同じ名称。

これらの名称をしてみると、バナナには、スバと呼ばれるものとツヌムと呼ばれるものがあることがわかる。

また2) と7) に本当のスバ、本当のツヌムという名称がみられる。何が「本当」なのだろうか。「本当のツヌム」は「おいしいツヌム」と同じものだということで、「おいしい」バナナこそ真のバナナという意味なのだろうか。

その他、名称には丈が高いなど、バナナの形状を表す語で呼ばれているもの5) 6)、実の色を表現しているもの1) 3) 4)、味を表現しているもの7) 8) がきかれた。インドネシアの南スラウェシを調査した小松かおりによると、調査地の言語マンダール語ではバナナはロ

カ (loka) といい、それぞれの品種はロカの後ろに形容詞をつけることであらわされるという [小松 2009: 447]。(a) から (d), 1 から 8) の名称では、ツヌムとかスバとか、バナナを指す単語に「丈が高い」や「酸っぱい」などといった語が付加されることでバナナの名称が示されている。(a) から (d), 1 から 8) に見られた名称も小松の調査したインドネシアのマンダール語と同じようなバナナの品種名称のつけかたが聞かれる。

#### IV ツヌムとスバ

##### 1 『台湾原住民族影像誌 鄒族篇』にみるツヌムとスバ

上述したツォウ族のバナナにおける名称をみると、バナナには大きくツヌムとスバがあることがわかる。この 2 つはどう違うのだろうか。

『台湾原住民族影像誌 鄒族篇』で、第 8 章には、バナナの加工過程等が掲載されているが、ここに焼きバナナとバナナ餅について記述されている。焼きバナナはツォウ語で「フェグ ノ スバ」という [湯浅 2000: 169]。

言語学者の土田滋の指摘によると、中国語表記部分にツォウ語「h'uingū no suba」と書いてあるが、「huingū no suba」は、「huingū」ではなく「h?irngi」で、これは「h-?irngi」と分析でき、「灰の中で焼かれたもの」を表すのだという [土田 2000: 231]。つまり、灰の中で焼かれるバナナはスバということが示されている。

『民族影像誌』には、バナナを焼いている様子の写真が掲載されている。屋外に 3 つ竈型に並べた石に薪を突っ込み、焼けたバナナの皮をはいでいる写真である。バナナ餅については、焼きバナナの解説とともに次の一文がある。「バナナの品種はスバ。バナナを焼いたり、バナナを煮てバナナ餅にして食べる」。この文章からスバというバナナは、焼いて食べること、煮てバナナ餅をつくることわかる [湯浅 2000: 169]。

バナナ餅についての記述で注目されるのは、モチゴメやアワを混ぜずにバナナだけでつくったバナナ餅は「ウフィ ノ スバ」ということで、モチゴメやアワを混ぜて作ったバナナ餅「ポアツヌム」と区別していた [湯浅 2000: 170]。この記述から、バナナだけでつくるバナナ餅は、スバで作ったことがうかがえる。

同じ個所に、ブユクイ、バンカケは餅にはしなかったという記述がある。ブユクイ、バンカケは、上述の (b) と (d) に記したように、(b) ツヌム ノ ブユクイ、(d) ツヌム ノ バンカケとっており、スバではない [湯浅 2000: 117-118]。

これらから 1930 年代には、煮炊き用、焼き用バナナはスバであったこと、ツヌムの中には、バナナ餅にむかないバナナがあると考えられていたことがうかがえる。

## 2 ツヌムとスバの違いについて現在のツォウ族の人の説明

現在のツォウ族の人は、ツヌムとスバをどのように違うと考えているのだろうか。説明してもらったところによると、ツヌムが市場に流通しているフルーツバナナのこと、つまり外来種を含んだバナナで、バナナ一般を指している。それに対し、スバは在来種を指し、市場流通バナナは含んでいない。中国語で前者のフルーツバナナ、バナナ一般は「香蕉」というが、在来種のバナナは「香蕉」の一種ではあるが、個別に「芭蕉」「粉蕉」など、固有の名称をもつ。ツヌムとスバはそういう関係だから、「ツヌム ノ スバ *cnūmū no suba*」、つまり「スバというバナナ」という言い方もできるという。

また、スバはバナナの幹（仮茎）の丈の高さや葉の大きさ、葉の色などが違うので、外観をみればすぐにわかるという。

植物としてのバナナをみてツヌムとスバを区別できない人でも、バナナの果実についてはツヌムとスバを区別できるという。一般に流通しているバナナに比べスバの果実は短くて太いといい、食感が少しぼそぼそしている、あるいは酸っぱいと表現される。屏東の台湾香蕉研究所で研究所員の方にそうした特徴をきいたら実が短くて太いとか、酸っぱい、舌触りがぼそぼそしているなどは、繊維の多いパルピシアーナ系のゲノムが含まれているときに示される性質なのだという。

あるツォウ族の60代の男性は、スバはよく見かける短くて太いバナナ以外にも、以前は牛の角くらいの太さで、長さ40センチくらいで、曲がり方が少ないスバがあった。このバナナは大きいので、1本たべると満腹になったのだが、近年はみかけないという<sup>4)</sup>。スバが在来系バナナだとしても、時代的な変遷があったことが推測される。

瀬川孝吉は、ツォウ族には煮炊き用バナナがあることに注目したが、そうした煮炊き用バナナをかつて栽培し、それでバナナ餅をつくっていたという記憶と伝承は、現在、どのように維持されているのだろうか。ツヌムとスバの違いは、煮焼き用バナナと生食バナナなのだろうかと考え、この点を意識して現在のツォウ族の人に聞いてみたが、現在、バナナ餅は普通に市場で買えるバナナでつくっており、煮炊き用バナナというものは知られていないようであった。つまり、調査期間中、生食用がツヌムで、煮炊き用がスバだという回答を得ることはできなかった。

4) インドネシアには *Horn banana* (中国語名 牛角蕉) がある。40cm を超える長さで、1本 800g ほど。1房の本数は、私たちが普通にみかけるバナナと比べると少なく、房のバナナも不規則にでてる [蔡 2015 : 23]。このバナナのことであろうか。これが以前はツォウ族の居住地で栽培されていたのだろうか。

### 3 非食用バナナの種類

フフ fuhū という非食用バナナがある。群生したものはフフフ fufuhū というのだという。山などに自生している（写真 7）。熟すれば甘くなり食べることもできるが、種が多いためふつうは食べない。だから栽培もしていない。敷地の境界に目印として、バナナを植えることがあるが、このときフフを植えることもあるという。フフはツォウ族では猿が食べるバナナだとか、リスが食べるバナナだという。

果実は小さく丸みを帯びた 10cm に満たないくらいの長さのものが房をつくっている（写真 8）。暗い赤紫色を帯びている。丸みを帯びた果実は、角張っている部分があるので、そこで縦に筋がはいっているように見える。実の内側には仕切があり、それぞれ仕切りの内側に種がある。種の味は渋い。試しに大ききの違う実を 2 つ、種の数を数えたら、212 個と 242 個であった。実を割ると粘液がでてきて、ねばねばする（写真 9）。



【写真 7】 fuhū の花と実



【写真 8】 fuhū の実は濃い紫色で小さい。大きさを右のボールペンと比較。



【写真 9】 右写真。fuhū の実の断面。種が多い。粘性のある水分が出てきた。

ツォウ族の60代男性の説明によると、フフはツヌムにもスバにも属さず、fuhūとかfufuhūとのみいうのだと言っていた。なぜなら、一般的には人が食べないので、ツヌムでもスバでもないのだということであった。こうした見方をする人がいる一方で、フフをツヌムだとする者もいた。その人は、ツヌムノフフ enūmū no fuhū ということができると言っていた。

ツォウ族で猿のバナナとか、リスのバナナと呼ばれる種のある非食用バナナは、土田滋先生によるとブヌン族イスブクン Bunun-Isbukun ではハニト（オバケ）のバナナ（ブンブン ト ハニトウ bunbun to hanitu<sup>5)</sup>）といい、ブヌン族でも、バナナはツォウ族同様に、名称が3つに分けられているのだという。

a) バナナ一般を指す「ブンブン bunbun」

b) 太くて短いバナナを指す「ブンブン スバ bunbun suba」

c) バナナに似ているが食べない「ブンブン ト ハニトウ bunbun to hanitu」。

b) の「太くて短いバナナ」は、在来種由来のものなのだろうか。もしそうだとすると、ブヌン族でも、ツォウ族同様、バナナ一般、在来種系統のバナナ、非食用バナナという区別があったことがわかる。それは、ツォウ族でもブヌン族でも「スバ」といわれる短くて太いバナナを、ツヌムやブンブンといわれるバナナ一般と区別していたことを示している。

## V ツヌムとスバの分類をどう考えるのか

上述したように、現在のツォウ族の人にツヌムとスバの違いをたずねると、スバが在来種でツヌムが広く在来種も含んだバナナ一般だという答えをきいた。しかし、1930年代に瀬川が撮影した写真を集めた『民族影像誌』には、ツヌムについて次の記述がある。

「バナナ（ツヌム） 来歴、渡来系路、時期は不明であるが古くより栽培されているもので、漢民族とは関係なくツォウ固有と思われる。種類も多く大別して成熟して果実の皮を除いて生食するタイプと加工してから食用するタイプがある」[湯浅 2000 : 116]

この文章からわかることは、1930年前後は、ツヌムもツォウ固有のもの、つまり在来種だったということである。すなわち現在一般にきかれる、「スバは在来種でツヌムはバナナ一般」という分類は、古くには違っていた可能性がある。

5) 国立台湾大学植物標本館がつくっているウェブサイト「台湾植物誌 Flora of Taiwan 第2版 Flora of Taiwan, 2<sup>nd</sup> edition Vol.5」の「芭蕉科」,および「植物名彙與基本資訊」〈台湾芭蕉〉のなかの「各言語俗名」には植物の学名、中国語名のほか台湾語、客家語、日本語、英語、原住民族語などが記されている。それによると、台湾芭蕉は、ブヌン語で Bunbun kanito というところある。土田の bunbun to hanitu と同じものと思われる。つまりカニト、ハニトはアニト、つまりお化けのバナナの意味である。(国立台湾大学生態學與演化生物学研究所 国立台湾大学植物標本館 (2012) 台湾植物資訊整合查詢系統 <http://tai2.ntu.edu.tw> (online) 2012 2020年12月10日参照) これは熟すると果実は可食であるが、未熟の果実は薬としていた [鄭 2000: 1427]。



(3) で示したように、ブヌン族のバナナの 3 つの分類とツォウ族の 3 つの分類は類似していること、また、b) にみるように、ツォウ族とブヌン族で「スバ (suba)」という単語を使っていることなど共通点がみられる。

バナナが古くからの栽培植物で、台湾に渡ってきた後、各原住民族がそれぞれで栽培し、固有なものを育てていたことを考え合わせると、「ツヌム」と「スバ」の分類は、現代人がいう「フルーツバナナ」と「在来種バナナ」という分類ではなく、もっと深いところで原住民族の食文化とかかわってきた区分の可能性はある。

## おわりに

瀬川孝吉が 1930 年代前後に撮った写真をあつめた『台湾原住民族影像誌 鄒族篇』が出版されたのは西暦 2000 年であった。瀬川は台湾原住民族のなかで、ツォウ族のバナナには、生食用とは別に煮炊き用のバナナがあるということに注目した。今回はこの点に注意し、現地調査をすすめた。その結果、1930 年代と現代では、ツヌムのスバというバナナの分類が異なっているのではないかという疑問がでてきた。そのほかにも、瀬川の写真集に掲載されていない品種名などが今回、聞かれた。

ツォウ族の人は、出かけた先でめずらしいバナナの品種があるとその植物の一部をもらい自分の家に植えるということ、普段におこなっているらしく、今回の調査でもそうした実態がしばしば見られた。ひとりの人が仕事や旅行などで出かける地域の範囲が 1930 年代と比べて格段に広がっている今日の社会では、1930 年代と比べると、在来種系のバナナにも変化が起こっていることが考えられる。

ツォウ族の、バナナに対する認識やその利用法は、在来種の品種も含め、1930 年代から 90 年間に変化している可能性がある。

## 謝 辞

調査には、福岡大学の宮岡先生並びに宮岡先生にご紹介いただいた阿里山郷ご在住のツォウ族の石昕翰さんと息子さんご一家をはじめ、楽野、山美、里佳、トフヤのツォウ族の方々にたいへんお世話になりました。また、ブヌン語をはじめとした原住民族のバナナに関する調査資料をおくっていただいた土田滋先生、植物やバナナについて大阪学院大学の竹井恵美子先生にいろいろとご教示いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

## 参 考 文 献

[日本語文献]

石垣直

2010 書評『瀨川孝吉 台湾原住民族影像誌 布農族篇』湯浅浩史著 日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』14 風響社 207-213

国際農林水産業研究センター

1997 「バナナ」『熱帯果樹とその利用』農林統計協会 24-32

小松かおり

2009 「バナナの商品化と品種多様性—インドネシア・南スラウェシの事例から—」山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物学的研究—』国立民族学博物館調査報告 84 445-466

齋藤外二

1932 「台湾のバナナについて」全国中学校地理歴史科教員協議会編『全国中学校地理歴史科教員第九回協議会及び台湾南支旅行報告』325-327

瀨川孝吉

1954 「高砂族の生業」『民族学研究』18 (1-2) 49-66

ダン・コッペル (黒川由美訳)

2012 『バナナの世界史—歴史を変えた果物の数奇な運命—』太田出版

土田滋

2000 「書評『瀨川孝吉 台湾先住民写真誌』に見える主として現地名に付いてのコメントおよび生後表」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究』5 風響社 215-233

渡慶次賀敬

2000 「バナナ」農文協編『果樹園芸大百科 17 熱帯特産果樹』社団法人 農山漁村文化協会 123-132

松澤員子

1995 「写真でみる日本統治期の台湾先住民の生活—瀨川孝吉氏の写真資料紹介」『民博通信』68 92-95

湯浅浩史

2000 『瀨川孝吉 台湾原住民族影像誌 鄒族篇』南天書局

2009 『瀨川孝吉 台湾原住民族影像誌 布農族篇』南天書局

[中国語文献]

蔡雲鵬編著

2015『臺灣的香蕉』台灣香蕉研究所出版

台湾植物誌編纂委員会編

1978『台湾植物誌』5 第1版 (Flora of Taiwan, 1<sup>st</sup> edition Vol.5)

2000『台湾植物誌』5 第2版 (Flora of Taiwan, 2<sup>nd</sup> edition Vol.5)

鄭武燦

2000『台湾植物図鑑』（下冊）国立編訳館 茂昌図書有限公司発行

鄧澄欣・朱慶国編著

1996『台湾香蕉種原収集與保存図介』台湾香蕉研究所

[参考ウェブサイト]

国立台湾大学生態學與演化生物学研究所 国立台湾大学植物標本館 (2012) 台湾植物資訊  
整合查詢系統 (<http://tai2.ntu.edu.tw>) (2020年12月10日最終確認)